

気象界消息

1 ダフィ氏 再び来日

WMO 通信関係視察のため20ヶ国余の訪問を終えたカナダ気象局 Duffy 氏は再度、9月22日から10日間、来日した。

2 坂岸氏 渡欧

原子力研究所 坂岸昇吉氏は原子炉関係の大気汚染防護視察のため、10月11日、欧州へ向った。約40日、ヨーロッパおよびアメリカの各地を視察する予定。

3 森安氏 渡米

神戸海洋気象台 森安茂雄氏(海洋課調査官)は10月16日海洋学研究のため、渡米する。留学先はオレゴン大学。

4 渡辺和夫氏 渡米

気象研究所台風研究部の渡辺和夫氏は日米科学協力研究にもとづく「太平洋上の空の観測」に参加のため、10月20日から約1ヶ月の予定で渡米する。

5 URSI 会議出席の外国気象関係者

光号で一部お知らせしたが、9月上旬のURSI 総会出席のため来日した気象関係の学者は次のとおりであった。

K. Ramanathan (インド), A. Vassy (フランス), R. Mühleisen (ドイツ), L. Königfeld (ベルギー), D. Atlas (アメリカ), J. Marshall (カナダ), Hay (カナダ), S. Bigler (アメリカ), Falconer (オーストラリア)

6 有住・松島両氏 沖縄へ

10月7日、気象庁高層課 有住直介・松島富美雄の両氏は石垣島高層観測開始の指導のため沖縄へ向った。約3週間滞在し指導にあたる。

7 10日も早い初冠雪

9月16日、平年より10日も早く北アルプス一帯に初雪があった。20m/s の強風を伴った吹雪のため長野駅白

馬は氷点下 5°C を記録した。

8 ハリケーン、アメリカ南部をおそう。

アメリカ・テキサス州沿岸一帯に9月16日、ハリケーンが突然おそった。シンディの風は 22m/s を記録した由。

9 北海道の集中豪雨

9月15日から16日朝にかけて、北海道奥尻島をおそった集中豪雨は死者1名、行方不明10名、負傷10名をだしたと報じられている。

10 ノースカロライナのたつまき

9月28日、アメリカ・ノースカロライナ州、ディロン市にたつまきがおそい、3名が死亡、24名が負傷したとのこと。

11 台風、日本とハイチへ

10月5日、台風17号が八丈島南方をかすめて通過したが、被害はなく台風王国に珍しい静かな10月だったが、ハイチから1英領バハマ島へ抜けた10月6日のハリケーン、フロラは猛威は、ハイチで4000名以上の死者が出たとのこと。

12 パキスタンのサイクロン

10月8日には、東パキスタン、チャタゴン附近をおそったサイクロンが、家屋1000戸以上を破壊しきった由、また、バリサル沖で1隻の船が沈没したとの報もあった。

13 イタリアの山くずれ

10月11日、イタリア、バイオンテ貯水池は豪雨にゆるんだ山くずれにおそわれて、わずか数時間の中にダムがくずれおち、4000人以上が死傷したと伝えられた。

14 札幌管区気象台 燃える

10月2日、札幌庁舎の一部が火災をおこした。幸にも被害は少ない。

理事会 便り

第16回常任理事会議事録

日時 昭和38年10月7日17.00~20.00

場所 神田学士会館

出席者 増田、松本、須田、今井、正野、村上、神山、淵、各理事(順序不同) 鈴木委員

決議

1. 秋季大会で荒川昭夫氏に受賞記念講演、正野氏、磯野氏等にパークレー、ポールドーからの帰朝談を依頼する。

2. 中国学術代表团歓迎委員会の代表委員に正野理事長、委員に全常任理事があたる。
3. 臨時に日中学術交流委員会を編成し、国際学術交流委員の外に下記の諸氏に委員を依頼する。
渡辺次雄、田辺三郎、小林正治、北村正函、奥田讓、町田英三郎、磯野良徳、吉野まさ。
4. 国際雲物理会議に関する計画案の再検には今井理事があたる。(359頁につづく)

くる。気圧は上るときはゆっくり、下るときは急という性質がある。大体上るのに20時間かかったとすると、下るときは10時間位というのが1つの目安である。

8. 有住直介(気象庁予報課): 上層天気図の利用法
上層気天気図の見方と解説
昭和37年はこの他、以下に述べる研究会例会が開催された。

○第11回山の気象研究会例会

昭和37年9月14日(金)午後6時
気象庁第1会議室

1. 夏の北アルプスの天気分布
日大山岳部OB 菅原省司
2. 山岳気象放送について 気象庁 中村 繁
3. 文献紹介「冬季 Milešovka における粗水の形成について」
気象庁 奥山 巖
4. 超高層天気図の話 気象庁 大井正一

○第12回山の気象研究会例会(雪崩遭難体験者を囲んで)

昭和37年11月30日(金)午後5時

気象庁第1会議室

1. 北ア涸沢の雪崩 日大山岳部OB 菅原省司
2. 北ア北鎌沢の雪崩 専大 杉沢博明
3. 35年11月の富士山の雪崩
元アルピニスト教室 和田達雄
東京理科大 竹原祐爾, 百瀬常剛
慶大医学部 和田孝雄
4. 討論会

○第13回山の気象会例会(今冬の遭難の検討)

昭和38年3月8日(金)午後6時
気象庁第1会議室

1. 38年正月の気象
(1) 南アの気象 富士重工 菊地和夫
(2) 八方尾根の気象 気象庁 田中正一, 増田次夫
2. 今冬の遭難と気象 気象庁 官内駿一
3. 富士山のデーターの使い方 気象協会 大塚竜蔵
(文責, 奥山)

九州支部だより

気象懇話会順調に発足知識の交流に寄与

学会支部と福岡管区気象台との共催として、“気象懇話会”が正式に発足したのは5月31日であった。この動機については、“支部だより No. 15”に掲載されたとおりであるが、さらに同誌の“気象学全般の広報を望む”と題した沢田理事の論説の中にも同じような主旨が述べられている。31日福岡管区気象台の台長室で初めて気象懇話会を開いたところ、予期以上の人が集り、会員はあとからの追加もあって現在33名に達した。この会のおもな内容である文献紹介については、原文または訳文のプリントを事前に全会員に配布するようにしたので、討論がかなり容易になった。まず、この会の推進者の一人である土井理事によって文献紹介が始められた。

その後、回を重ねるにつれて、この会もようやく軌道

に乗った感じで、現在まですでに3回の催しがあった。また、会場は気象台にかぎらず九州大学でも行なった。このことは会員の親睦、交流という点でも大いに役だっているようである。特に、第3回の催しのあとでは、沢田理事の説明で理学部の大気モデル実験室を見学するなど、思わぬ機会に恵まれ喜ぶ人もあった。また、今まであまり気象台に行くことのなかった人は、この機会を利用して気象資料を写したりしていた。

懇話会は毎回活発な討論が行なわれたが、これまでの文献はいくぶん程度の高いが多かったせいもあってか、また討論は会員全体に十分納得できるまでには至らないようである。また、紹介者のプリント作成に費やす労力もかなり負担になっている。将来はこのような点で少しずつ改善してゆく必要を感じている。

(360頁よりつづく)

5. 朝日賞に関しては今回は見送る。
6. 秋季大会中今井理事がニュージーランドにおけるWMOの熱帯気象シンポジウム出席不在のため神山理事が代行する。